

門真市幼保小の架け橋期カリキュラム

令和8年3月
門 真 市
門真市教育委員会

目 次

1. はじめに	1
2. 門真市の教育	2
3. 幼保小の架け橋プログラムとは	3
4. 3つの資質・能力	6
5. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と 「小学校で育ってほしい姿」の関係	7
6. 架け橋期カリキュラムの作成にあたって	10
◎ 門真市幼保小の架け橋期カリキュラム（基本版）	11
○ 参考資料	
・ 幼保小中合同研修会の実施報告について	12
・ 門真市幼児教育振興検討委員会委員名簿	28
・ 諮問書	29
・ 答申書	30

1.はじめに

近年、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。核家族化や共働き家庭の増加、地域のつながりの希薄化、さらにデジタル機器との接触の早期化などにより、子どもたちが多様な背景をもって集団生活に入ってくるようになりました。生活リズムが不規則であったり、他者との関わりに不安を抱えていたり、感情のコントロールが難しいといった様子も見られ、教育・保育の現場では年々支援の必要性が高まっています。

こうした状況の中で、就学前施設（保育所・認定こども園・幼稚園）と小学校の連携を強化し、子どもたちの育ちと学びを切れ目なく支えていく取り組みの重要性が増しています。文部科学省、厚生労働省、内閣府なども、5歳児から小学校1年生の2年間を「架け橋期」として位置づけ、子どもの発達の連続性を確保するよう求めています。

この考え方のもと、門真市では、就学前教育・保育と就学後の教育が分断されることなく、遊びを通した学びと教科を通した学びとが自然につながるよう、共通の目標と視点を持ったカリキュラムづくりを進めていきます。また、子どもに関わる全ての大人が一貫した理解のもとで協力しあえるよう、子ども理解や指導の在り方に関する共通言語を育むことも重要です。

このように、架け橋期の子どもの発達を連続的に支援し、学びと生活の基盤を地域全体で整えていくため、「門真市幼保小の架け橋期カリキュラム」を策定します。

2. 門真市の教育

令和3（2021）年1月、中央教育審議会において「令和の日本型学校教育の構築」に関する答申が取りまとめられました。この答申では、従来の学校教育が長年にわたり築いてきた強みを活かしつつ、AI等の技術革新により急激に変化する社会を生き抜く子どもたちに対して、「主体的に学ぶ力」「協働する力」「課題を発見・解決する力」などを育むことの重要性が示されています。

また、特別な支援を必要とする児童生徒、多様な背景をもつ児童生徒が増加する中、従来の一律的な教育では対応が難しくなっており、一人一人に応じた学びの実現が求められています。そのため、日常の授業においては、児童生徒一人一人の興味・関心・理解度に基づき、それぞれに応じた方法で学びを進める「個別最適な学び」と、他者と意見を交わしながらともに課題に取り組み、考えを深める「協働的な学び」を一体的に充実させることが重要とされ、全ての子どもたちの可能性を引き出し、持続可能な社会の担い手として育成することが期待されています。

門真市においては、令和5（2023）年度に実施された全国学力・学習状況調査において、学力の向上が見られた一方で、児童生徒間の学力格差や、「主体的に学ぶ力」及び「課題を発見・解決する力」に関する課題が見られました。これらの課題を改善し、さらなる学力向上を図るため、令和6（2024）年度より「子ども主体の学び」と「探究的な学び」を柱とし、児童生徒自身が学び方を選択したり、課題を設定したりできるような授業改善を、市内全校で推進しています。日々の授業で、児童生徒一人一人が学習の進め方や方法を自ら考え、試行錯誤しながら学ぶ機会を設けるとともに、自ら問いを立て、課題を見つけ、他者と対話しながら深く考え、学びを広げる学習を重視します。このような学びを実現するために、ICT機器も有効に活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、児童生徒の資質・能力の更なる向上をめざします。

また、これら教育の方向性については、本市の就学前施設が「門真市就学前教育・保育共通カリキュラム」に基づいて乳幼児期の発達の特性を踏まえたそれぞれの時期にふさわしい体験が得られるよう、生活や遊びを通した総合的な教育及び保育に取り

組んでいる点に共通する部分が多く、架け橋期の子どもの発達を連続的に支援するために、就学前教育・保育においても積極的に共有していきます。

3. 幼保小の架け橋プログラムとは

○「架け橋期」について

- ・義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期であり、この時期を「架け橋期」と言います。

- ・この時期の教育については、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校（以下「幼保小」という。）という多様な施設がそれぞれの役割を担っています。子どもの成長を切れ目なく支える観点からは、幼保小の円滑な接続をより一層意識し、乳児や幼児それぞれの特性など発達の段階を踏まえ、一人一人の多様性や0～18歳の学びの連続性に配慮しつつ、教育の内容や方法を工夫することが重要です。

- ・「幼保小の架け橋プログラム」は、子どもに関わる大人が立場の違いを越えて自分事として連携・協働し、この時期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育めるようにすることを目指すものです。本プログラムは、架け橋期に求められる教育の内容等を改めて可視化したものであり、関係者の負担軽減に留意しつつ、各地域や施設の創意工夫を生かした取組が広がり深まっていくことを期待しています。

◎実施にあたり、関係者で共有し大切にしていきたい視点

- ・特別な配慮を必要とする子ども（障がいのある子どもや外国人の子どもなど）を含む全ての子どもの可能性を引き出すため、ウェルビーイング^(※)を保障する意識を持ちましょう。

(※) 身体的・精神的・社会的に良い状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念

・子どもは周囲の環境に自ら関わり様々なことを学びます。幼保小を問わず、先生(※)や周囲の大人は、子どもの思いや願いを踏まえ、その学びや生活を豊かにしていく存在です。

(※) 幼児教育施設や小学校の管理職、幼稚園教諭、保育士、保育教諭、小学校教諭等

・幼保小の教育のつながりを意識した活動が、子どもの豊かな体験を生み出し、主体的・対話的で深い学びの実現につながります。

・施設類型・設置者・学校種を越えて、幼保小の先生が、気軽に話し合える関係を構築し、対話を大切にするとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて協働して取り組み、発信しましょう。

・全ての先生が関わるプロセスや、組織的な体制づくりを大切に、接続に関する取組を年間計画に位置付け、持続的・発展的な取組を目指しましょう。

・形式的な取組とならないよう、家庭や地域も一緒に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、子どもの姿を起点に話し合いを深めましょう。

○目指す方向性

・架け橋期のカリキュラムについては、幼保小が協働し、共通の視点を持って教育課程や指導計画等を具体化できるよう、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとし、育成を目指す資質・能力を視野に入れながら策定できるよう工夫する。そして、幼保小の先生が一緒に振り返って 評価し、改善・発展させていく。

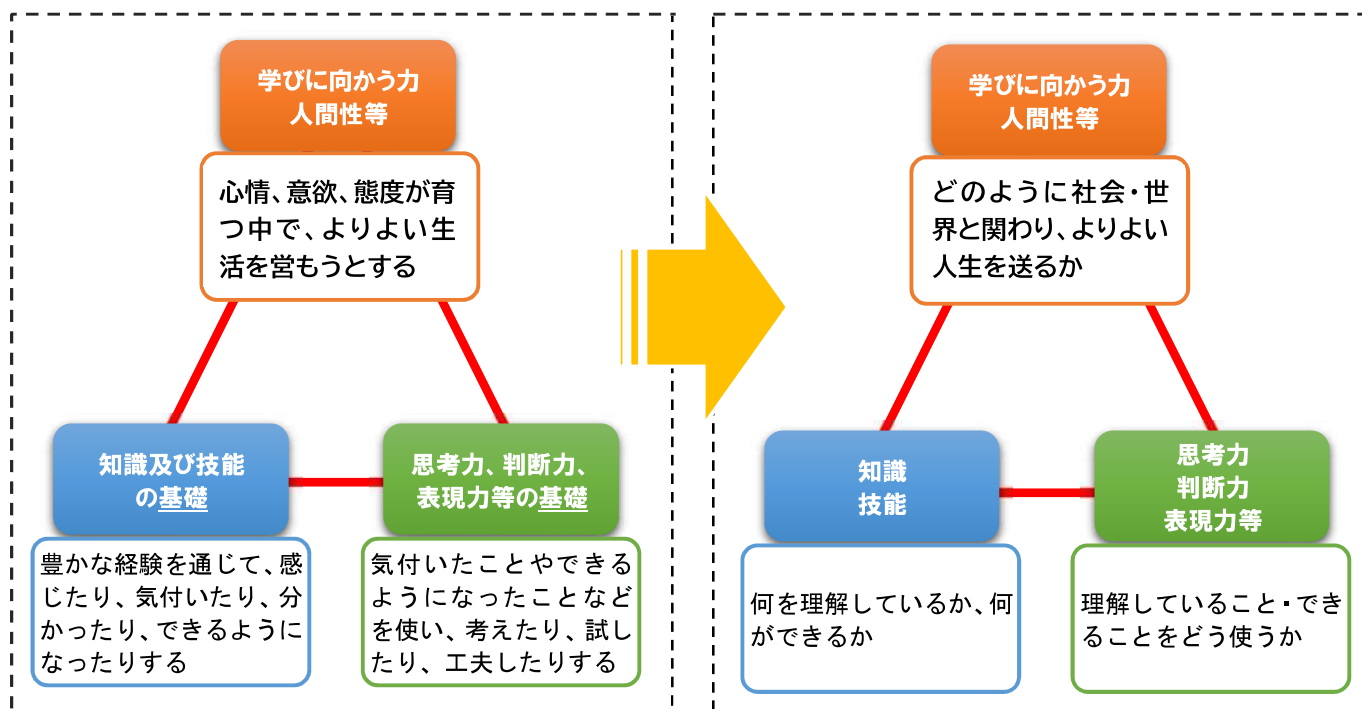
・取組全体を通じて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、園長・校長のリーダーシップと自治体の支援の下、園と小学校の先生が、子どもの育ちを中心に据えた対話を通して相互理解・実践を深めていく。

（「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」・「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～【概要】」文部科学省 を参考に作成）

4. 3つの資質・能力

〔幼稚園、保育所、認定こども園等において育みたい資質・能力〕

〔小学校・中学校教育等において育成すべき資質・能力〕



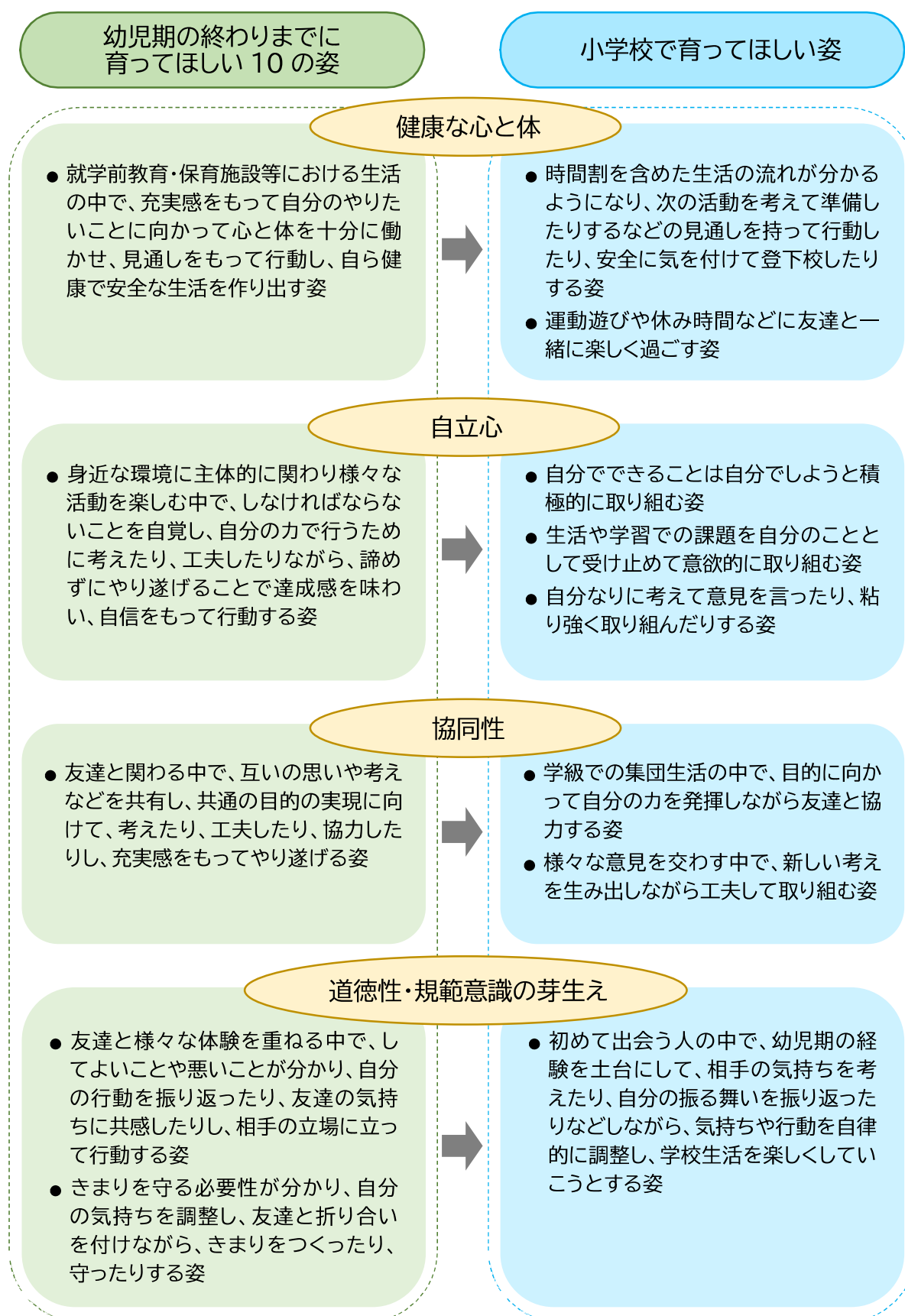
(「門真市就学前教育・保育共通カリキュラム(平成 30 年3月)」より抜粋)

※ 小・中学校で育成を目指す3つの資質・能力は、一見すると大人の視点のようにも捉えられますが、架け橋期においては、子どもが身近な人や出来事と関わる中で、その基礎となる力を自然に育んでいく過程として捉えます。大人の価値観で評価するものではなく、学習する子どもの視点に立ち、子どもの内側に芽生える意欲や関心、気づきを大切にします。

<参考:学校教育法第 30 条第2項>

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

5. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と「小学校で育ってほしい姿」の関係



幼児期の終わりまでに
育ってほしい10の姿

小学校で育ってほしい姿

社会生活との関わり

- 家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつ姿
- 就学前教育・保育施設等内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識する姿



- 相手の状況や気持ちを考えながら、いろいろな人と関わることを楽しんだり、関心のあることについての情報に気付いて積極的に取り組んだりする姿
- 地域の行事や様々な文化に触れることを楽しんで興味や関心を深め、地域への親しみや学びの場を広げていく姿

思考力の芽生え

- 身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむ姿
- 友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにする姿



- 小学校で出会う新しい環境や教科等の学習に対して興味や関心を持って主体的に関わる姿

自然との関わり・生命尊重

- 自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え、言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつ姿
- 身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わる姿



- 自然の事物や現象について関心を持ち、その理解を確かなものにしていく姿
- 生命あるものを大切に、生きることの素晴らしさの自覚を深める姿

幼児期の終わりまでに
育ってほしい 10 の姿

小学校で育ってほしい姿

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

- 遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつ姿



- 学習に関心を持って取り組み、実感を伴った理解をし、学んだことを日常生活の中で活用しようとする姿

言葉による伝え合い

- 保育教諭等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむ姿



- 友達と互いの思いや考えを伝え、受け止めたり、認め合ったりしながら一緒に活動する姿
- 自分の伝えたい目的や相手の状況などに応じて言葉を選んで伝えようとする姿

豊かな感性と表現

- 心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつ姿



- 音楽や図工、身体等による表現の基礎を身につけ、感性を働かせ表現することを楽しむ姿
- 臆することなく自信をもって表現し、学校生活を意欲的に進める姿

(「門真市就学前教育・保育共通カリキュラム(平成 30 年3月)」より抜粋)

6. 架け橋期カリキュラムの作成にあたって

(1) 小中一貫教育との接続

門真市では「門真市教育振興基本計画」において、義務教育9年間の「縦のつながり」を軸とした小中一貫教育を推進しています。「架け橋期カリキュラム」は、小中一貫教育の前段階として、就学前教育・保育から小学校教育への円滑な接続を図るためのものであり、幼児期の「遊びを通した学び」を、小学校の「教科を通した学び」へと確実につなげ、さらに中学校卒業までを見据えた連続的な学びの基盤を構築することを目的とします。

(2) 「3つの資質・能力」と「10の姿」

カリキュラムの作成にあたっては、「4. 3つの資質・能力」および「5. 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿と小学校で育ってほしい姿」を共通の目標として活用します。

就学前施設と小学校が3つの資質・能力の柱により子どもの成長を見取り、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を、小学校低学年における学習や生活の姿と関連付けることで、子どもたちにどのような力が育まれて小学校へ進むのか、また小学校側が育まれた力を教育活動にどのように活かすのかを明確にします。

(3) 中学校区単位によるカリキュラムの作成

架け橋期の教育・保育をより具体的な実践に結びつけるため、本カリキュラムは、「中学校区」を一つの単位として作成します。地域の就学前施設と小・中学校が、中学校区という共通の枠組みの中で対話を重ね、地域の子どもたちの実態や課題を共有します。これにより、就学前施設と学校間の垣根を越えて、地域全体で子どもを育む基盤を構築します。

次ページの「門真市幼保小の架け橋期カリキュラム（基本版）」は、これまでの内容を踏まえた教育方法の改善の視点等を表に示したものです。基本版を参考に就学前施設と学校の教職員が対話を通じて、各中学校区の架け橋期カリキュラムを作成します。

カリキュラムを地域全体で共有し、家庭・地域・施設・学校が一体となって架け橋期の子どもたちを支える体制を整えます。

幼保小中合同研修会の実施報告について

1. 概要

(実施日時) 令和7年9月30日 午後3時～午後5時

(実施場所) 門真市立門真市民プラザ4階 研修室A

(参加者) 中学校5名、小学校22名、園37名 計64名

(グループ) 11グループ(はすはな中A・B、二中A・B、三中A・B、四中、五中A・B、七中A・B)

(目的)

本研修会は、門真市就学前教育・保育共通カリキュラムについての理解を深めるとともに、幼保小の架け橋プログラムについて学び、幼保小中が連携し就学前教育から小学校教育への円滑な接続を図ることを目的として実施しました。

東大阪大学名誉教授の吉岡真知子氏より「架け橋期カリキュラム」についてご講演いただいたのちに「子どもに学びを委ねる」をテーマとして、幼稚園・保育所・認定こども園・小学校・中学校の教職員が一堂に会し、発達や学びの連続性について意見交換を行いました。

参加者は各所属における実践や課題を共有し、幼保小中の相互理解と連携を深めることを目的としました。

2. 架け橋期において大切にしていること

本研修会の開催にあたって、参加者に事前に「架け橋期において大切にしていること」について、聞き取りを行いました。

以下に、6つに整理しています。

① 児童・園児の理解と個性の尊重

- ・一人一人の持ち味や思いを理解
- ・「やりたい」思いや自主性を尊重し、選択・決定の機会を設ける
- ・個々の気持ちを大切にしつつ、活動や学びに参加できるよう支援

② 学び・生活の基盤づくり

- ・学習習慣・生活習慣の基盤を形成

- ・話す・聞く・考える・伝える力の育成
- ・集団活動や協力体験を通じて、社会性や人とのつながりを育む
- ・遊びや体験を通して、自然に学習や探究へつなげる

③ 自律性・主体性の育成

- ・自分で考え行動し、試行錯誤で解決策を見つける経験
- ・自分のやりたいことを自分で決めて行う探究・自律性の促進
- ・自分が何かできるという有能感を育む
- ・自分の思いや意見を言葉で伝える力を育成

④ 安心・信頼の環境づくり

- ・幼児・1年生が安心して過ごせる環境の整備
- ・教員・保育者が楽しむ姿を見せ、学びへの興味をもたせる
- ・「わからない・教えて・助けて」が言える環境の整備
- ・通いたいと思える学校・園環境の整備

⑤ 保護者との連携・支援

- ・子どもの主体的活動や学びの大切さを保護者に伝える
- ・小学校生活への不安や疑問を抱え込まないように、相談・共有の機会を設ける
- ・入学前・1学期後半の連絡会で得た情報を保護者に提供
- ・保護者の安心感を重視し、家庭との連携を強化

⑥ 授業・活動の工夫（小学校）

- ・授業形態を2分割・3分割にして集中力を維持
- ・座学にこだわらず、多様な活動で意欲的な学びを促進
- ・各教科での導入や教室環境の工夫により、学習への興味を喚起

3. 本研修会の意見交換の場で出された意見

以下に、各意見を抜粋・5つに整理しています。

① 子どもを信じ、見守る姿勢

- ・信じること

子ども自身に育つ力があることを信じるのが重要である。教えすぎず、答えをすぐに与えずに待つ姿勢が必要である。

- ・見守りと共感

子どもの思いや気持ちを受け止め、第一声は「どうする?」「どうしたい?」など、子ども主体の問いかけを行う。

② 教材・環境の工夫

- ・適切な教材・環境の整備

子どもの発達や興味に応じて、できることを基盤にしつつ、できない部分には適切な支援や挑戦の機会を設ける環境を整える。

- ・時間のゆとりと自由

型にはめず、子どもがやりたいことを尊重できる時間や環境を確保する。休み時間や自己選択の場面では、大人が我慢し、子ども主体の活動を大切にする。

③ 委ねる・自己選択

- ・自己決定・自己選択の尊重

子どもにやりたいことを決めさせ、選択肢を与えることが重要である。

- ・小さなステップでの委ね

子どもが繰り返し経験できる場面をつくり、興味関心に沿った支援を行う。

- ・大人の引き際

遊びや活動において大人が引くことで、子どもが主体的に行動できる環境を整える。

④ 対話・共感・関係づくり

- ・子ども同士の関係づくり

子ども同士をつなぐ環境をつくり、真似や観察を自由にできる場を提供する。

- ・対話と相互理解

思いを伝え、異なる考えを楽しむ心を育てることが重要である。

- ・家庭とのつながり

家庭との連携を意識した見守りや支援が必要である。

⑤ 教える姿勢から共に考える姿勢へ

- ・大人は相談役

子どもに全権委任し、教える姿勢ではなく共に考える姿勢をとる。

- ・アイデアの肯定と深掘り

間違いをすぐに正さず、子どもの自由な発想やアイデアを尊重する。

- ・ケンカの仲裁は控えめに

子ども自身で解決する場を尊重することが大切である。

<まとめ>

各グループの意見から、以下の視点が共通して見られました。

1. 子どもの主体性を信じ、見守ること
2. 自由・選択・体験の場を大切にすること
3. 対話や共感を通して関係を築くこと
4. 大人はサポート役に徹し、押し付けないこと

これらの視点は、幼児教育から小中学校教育における子ども主体の学びや生活支援の推進に有益であると考えられます。

4. アンケート結果報告

本研修会実施後、参加者を対象にアンケートを実施しました。

① アンケート回答状況

回答数：43 件

(参加者数：中学校 5 名・小学校 22 名・園 37 名・計 64 名)

② 設問別結果の概要

設問	「とてもそう 思う」割合	「まあまあそ う思う」割合
① 今回の研修は、期待や要望に応えることができたか	約 40%	約 60%
② 研修内容を理解できたか	約 42%	約 58%
③ 今後役に立てることができると思うか	約 37%	約 63%

→ ほとんどが肯定的な評価となっており、研修に対する満足度は高い結果となりました。

③ 自由記述からの主な意見・傾向

(1) 学び・気づきに関する意見

- ・「保育園・幼稚園・こども園における“遊びの中での学び”が印象的だった」
- ・「幼保の先生方の丁寧な教材研究や環境づくりに刺激を受けた」
- ・「委ねることと規律は対立ではなく表裏一体であると感じた」
- ・「主体性を育むためには、待つ・見守る姿勢や環境設定が重要であると再確認した」

→ 幼児教育の視点から学び直す機会となり、学校教育における実践改善の意欲が高まったことが伺えます。

（２）連携・交流に関する意見

- ・「普段関わることの少ない小中学校の先生方と話ができて貴重だった」
 - ・「幼保小中が同じテーマで意見交換する機会が非常に有意義だった」
 - ・「お互いの立場を尊重しながら連携する必要性を感じた」
- 幼保小中の垣根を越えた交流の意義が多くの参加者に実感されており、今後の継続開催を望む声が多数見られました。

（３）今後の課題・要望

- ・「具体的な実践例や事例紹介がもう少し欲しかった」
 - ・「同じ中学校区内での意見交換をさらに広げたい」
 - ・「小学校１年生の実際の生活・学習の様子を知る機会があるとよい」
 - ・「勤務年数や経験年数を考慮したグループ分けも有効では」
- 今後は、校区単位での深掘りや実践事例の共有など、より実践的な内容への期待が示されました。

５．総括

今回の研修は、「子どもに学びを委ねる」というテーマを通して、教育・保育現場における主体性の育成と規律の両立、また幼保小中の連携の重要性を再確認する機会となりました。

各園・学校から寄せられた意見や実践の工夫は、門真市架け橋期カリキュラムを策定するうえでの大切な視点や基盤となるものです。

こうした現場の思いや取組を踏まえ、「子どもが主体となって育ち・学ぶための共通理解」をもとに架け橋期カリキュラムの策定を進めていくことが重要です。

今後も、園や学校の枠を越えた協働の場を継続的に設け、現場の実践と架け橋期カリキュラムが相互に高め合うよう取り組みを進めます。

(参考Ⅰ：「架け橋期において大切にしていること」抜粋)

【園】

- ・《やりたい》思いを大切にし、自分で選択して決める機会や《やりたい》時に《やりたい》ことができる環境を整える。
- ・個々の気持ちを尊重しながら、みんなで活動する楽しさが感じられるようにする。
- ・わからない・教えて・助けてが言える。
- ・友達と協力してやり遂げる経験
- ・試行錯誤しながら自分なりに解決策を見つける。
- ・就学に向けての興味意欲を高める。
- ・友達との対話、人とのつながり
- ・自分が何かできるという感覚 有能感
- ・自分のやりたいことが自分で決めてできる 探求と自律性
- ・自分で考えて行動する。
- ・自分の思いを言葉で伝える。
- ・相手の気持ちになって考えられる。
- ・基本的な生活習慣を確立する。
- ・主体的な学びを大切に捉え、普段の生活、保育の中で意識的に取り入れる。
- ・集団（仲間）での学びを大切に捉える。
- ・色々なことに挑戦し、経験を広げる。
- ・保護者支援
- ・子どもの気づき（発見）や試行錯誤する、主体的に活動する大切さを保護者に知らせていく。
- ・保護者が小学校生活への疑問や不安を強くもちすぎないように、聞いたり共有したり、気軽に話せる機会を大切にしている。また、入学前及びⅠ学期後半の進学時の連絡会（情報交換）で得た情報は保護者へも情報を提供するようにしている。

【小学校】

- ・児童の持ち味をつかむ（一人ひとりの子どもを理解する）。
- ・保護者とつながる（保護者の安心感）。
- ・教員が楽しんでいる姿を児童に見せる（いろんなことに興味を持たせる）。
- ・Ⅰ年生児童と学校の人たちをつなげる（教員・上級生など）。
- ・Ⅰ年生が安心して過ごせる環境づくり（集団づくり、人をつなげるなど）

- ・通いたいと思える学校環境づくり
- ・個に応じた丁寧な指導
- ・教室環境の工夫
- ・各教科での導入の工夫
- ・遊びから学習へ自然につなげる経験
- ・安心して生活できること：入学直後の不安を和らげ、友だちや先生との関わりを通して「学校は楽しい」と感じられるようにする。
- ・学習習慣や生活習慣の基盤づくり：話を聞く・考える・伝えるといった学びの基本を、無理なく身に付けられるように支援する。
- ・45分の授業にすぐに移行せずに、2分割、3分割の授業形態にし、子どもが飽きないように工夫した。
- ・席について学習することにこだわらず、いろいろな活動を通して子どもが意欲的に学習できるよう心がけた。

(参考2：研修で出された意見抜粋)

1. 子どもを信じ、見守る姿勢

- ・信じる：子ども自身に育つ力があることを信じる（七中 B、三中 A）
- ・待つ・見守る：答えをすぐに与えず、子どもの主体的な行動を待つ（七中 B、二中、はすはな B、三中 A）
- ・気持ちの共感：子どもの思いや気持ちを受け止める（七中 B、七中 A、三中 B）
- ・第一声：問いかけは「どうする？」「どうしたい？」など、子ども主体の問いかけを重視（七中 B）

2. 教材・環境の工夫

- ・適切な教材環境：子どもができることを用意し、できないことも理解して環境を整える（七中 B、三中 A）
- ・時間のゆとり・自由：型にはめず、子どもがやりたいことを尊重できる時間・環境を作る（五中 B、三中 B、四中）
- ・自然発生の大切さ：休み時間や自己選択の場面で、大人が我慢し子ども主体の活動を重視（五中 A、五中 B）

3. 委ねる・自己選択

- ・自己決定・自己選択：子どもにやりたいことを決めさせ、選択肢を与える（はすはな B、三中 B）
- ・小さなステップでの委ね：繰り返し経験できる場面を作り、興味関心に沿った支援（七中 B）
- ・大人の引き際：遊びや活動で大人が引くことで、子どもが主体的に行動できる（三中 B）

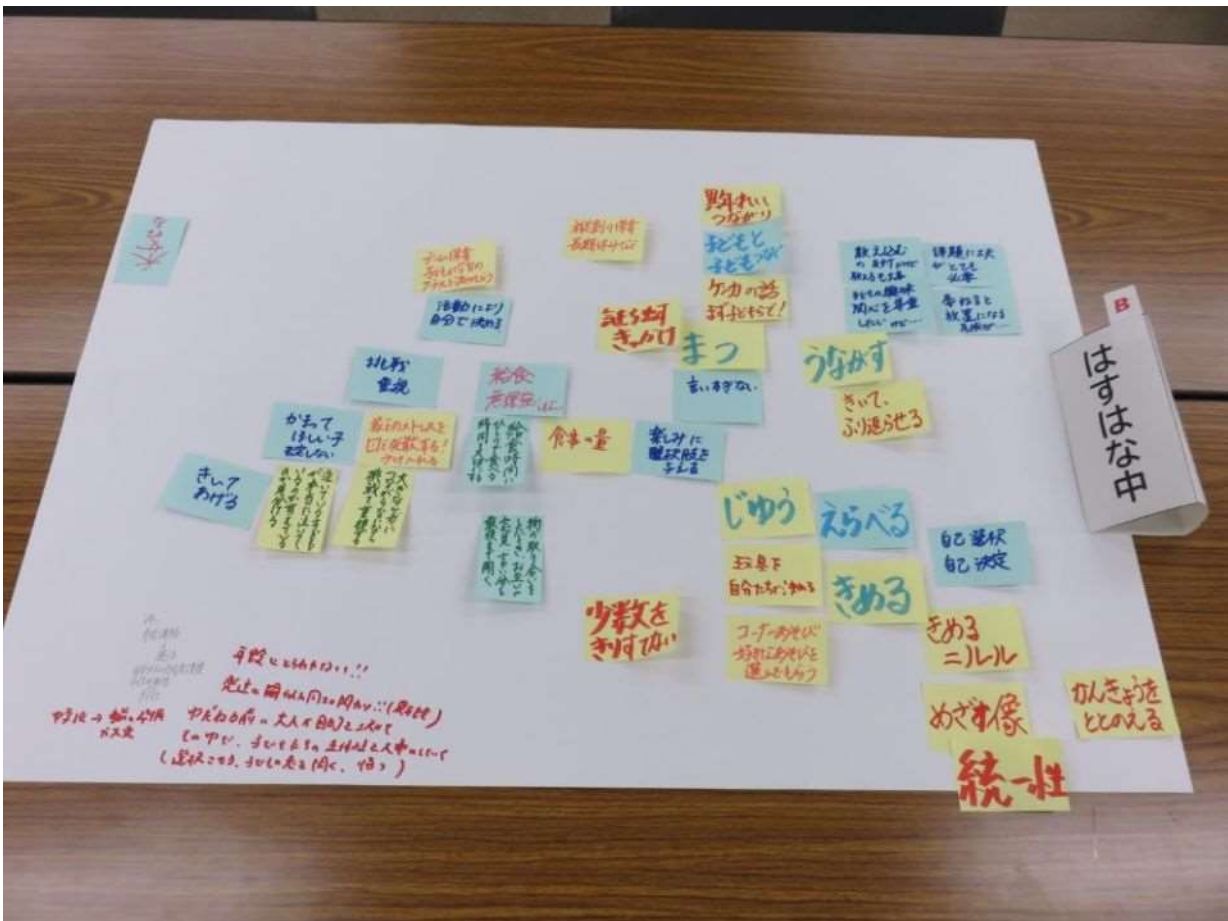
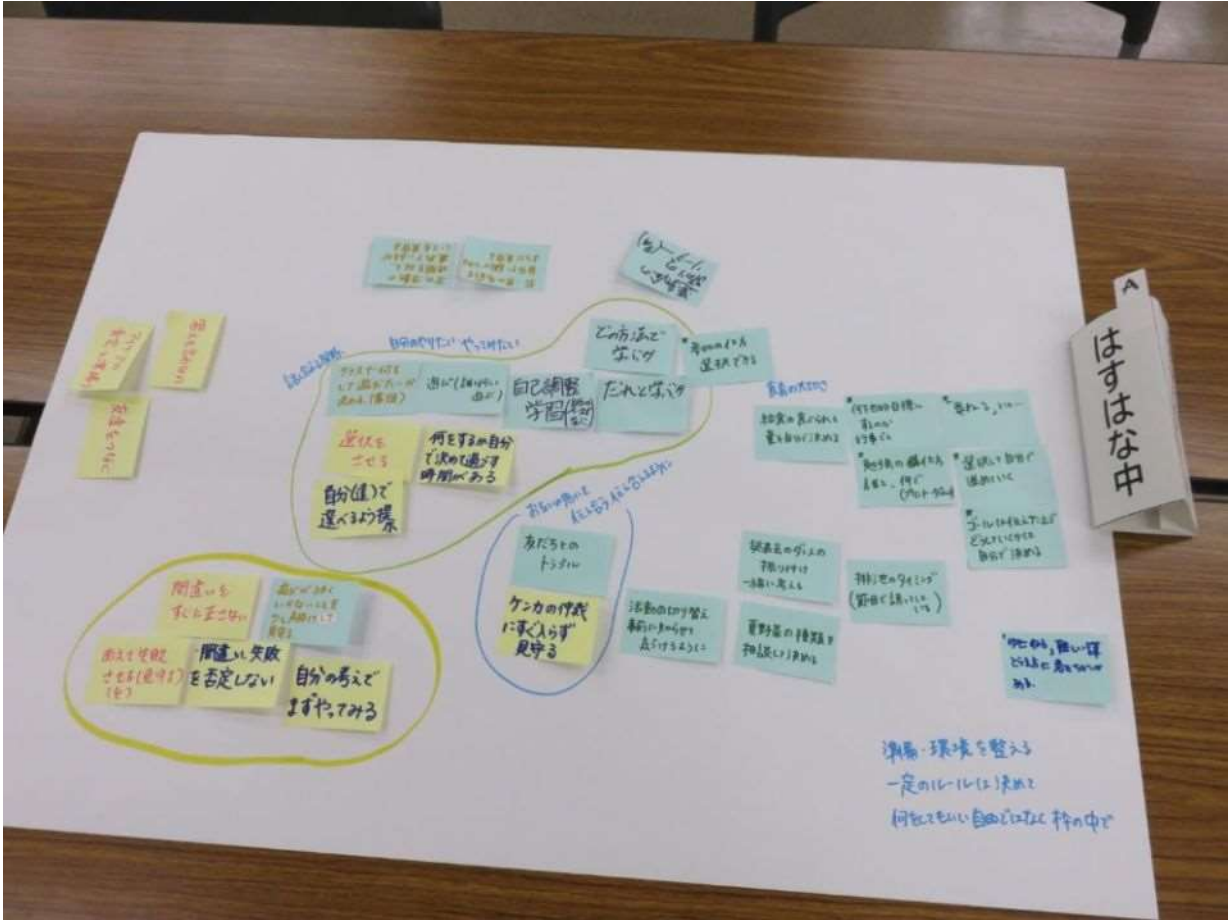
4. 対話・共感・関係づくり

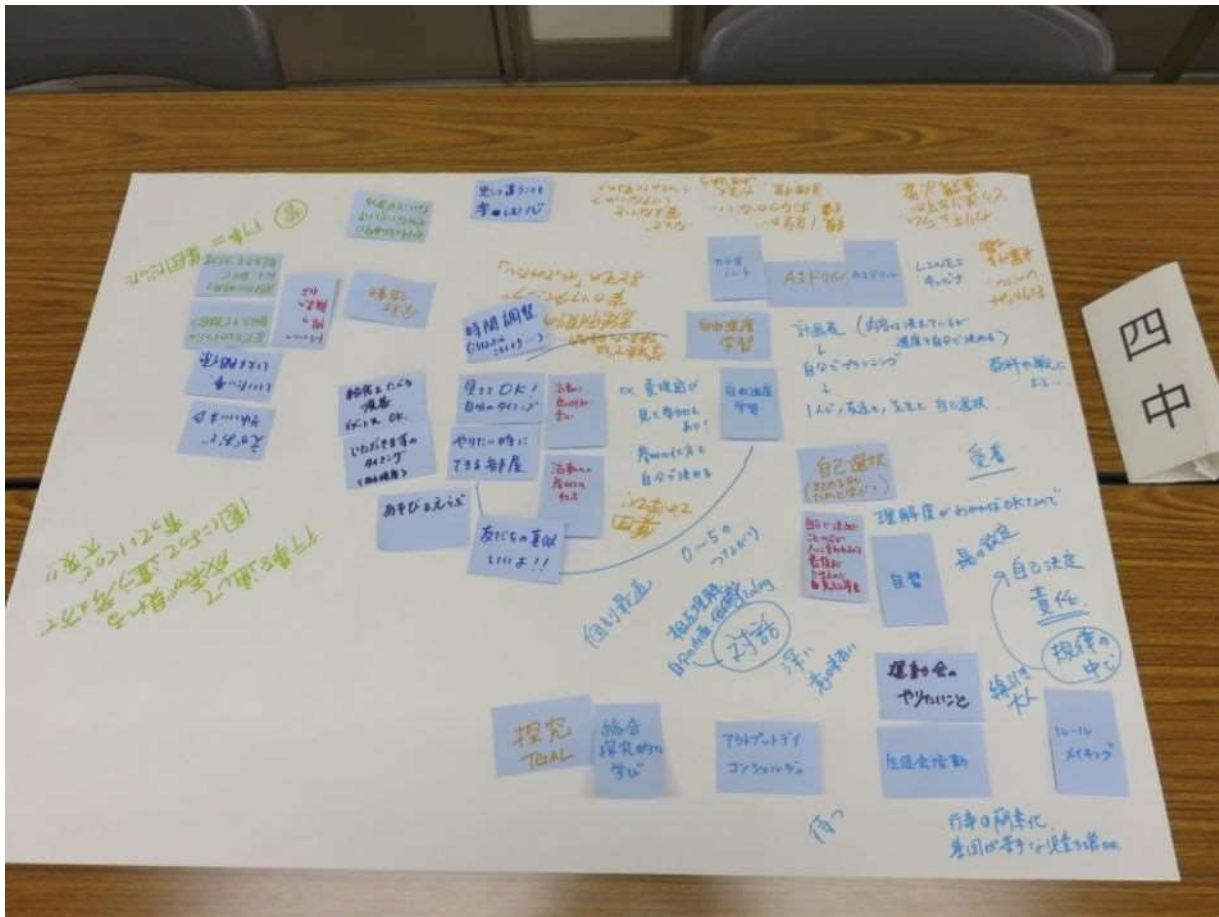
- ・子ども同士の関係：子ども同士をつなぐ環境、真似や観察の自由（はすはな B、四中）
- ・対話・相互理解：思いを伝え、違う考えを楽しむ心を育てる（四中）
- ・家庭とのつながり：家庭との連携を意識した見守り・支援（二中）

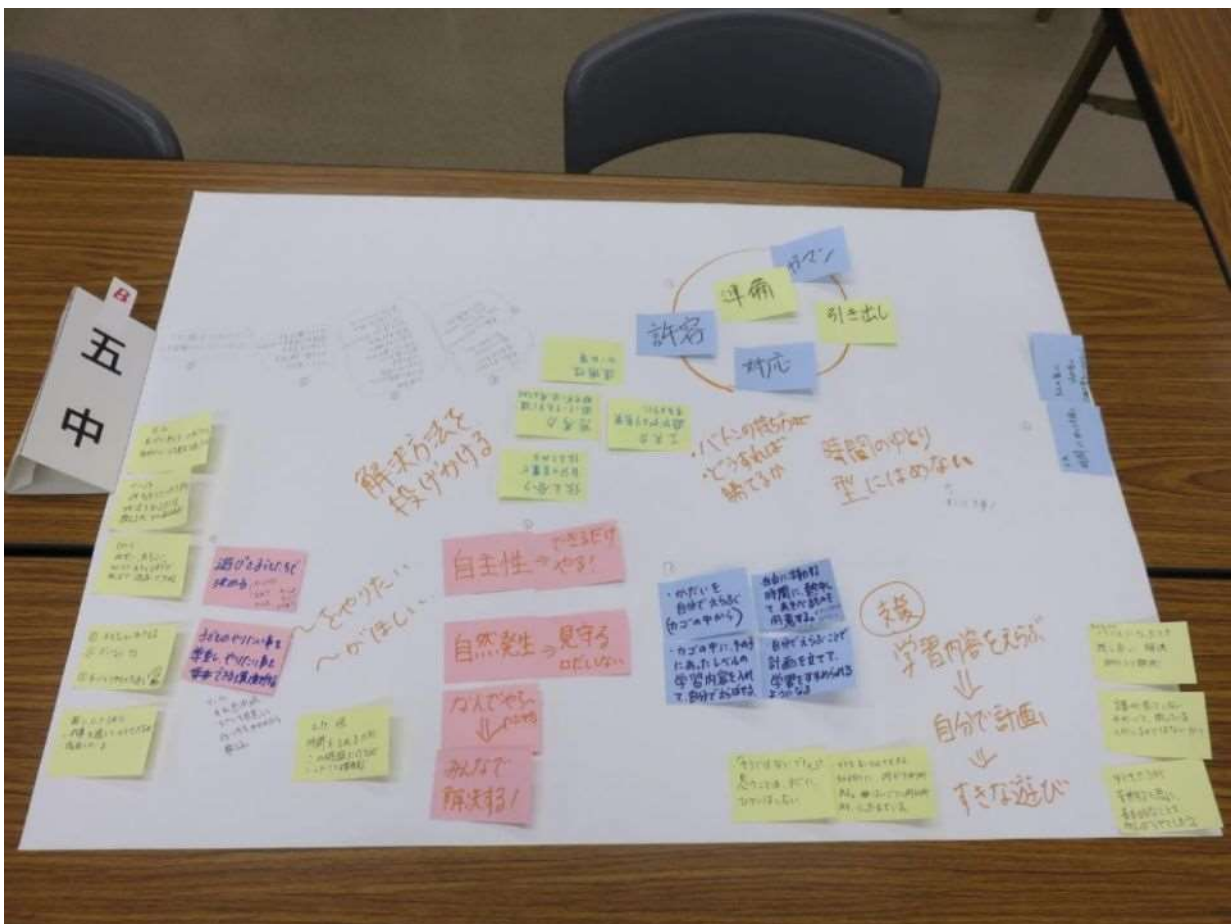
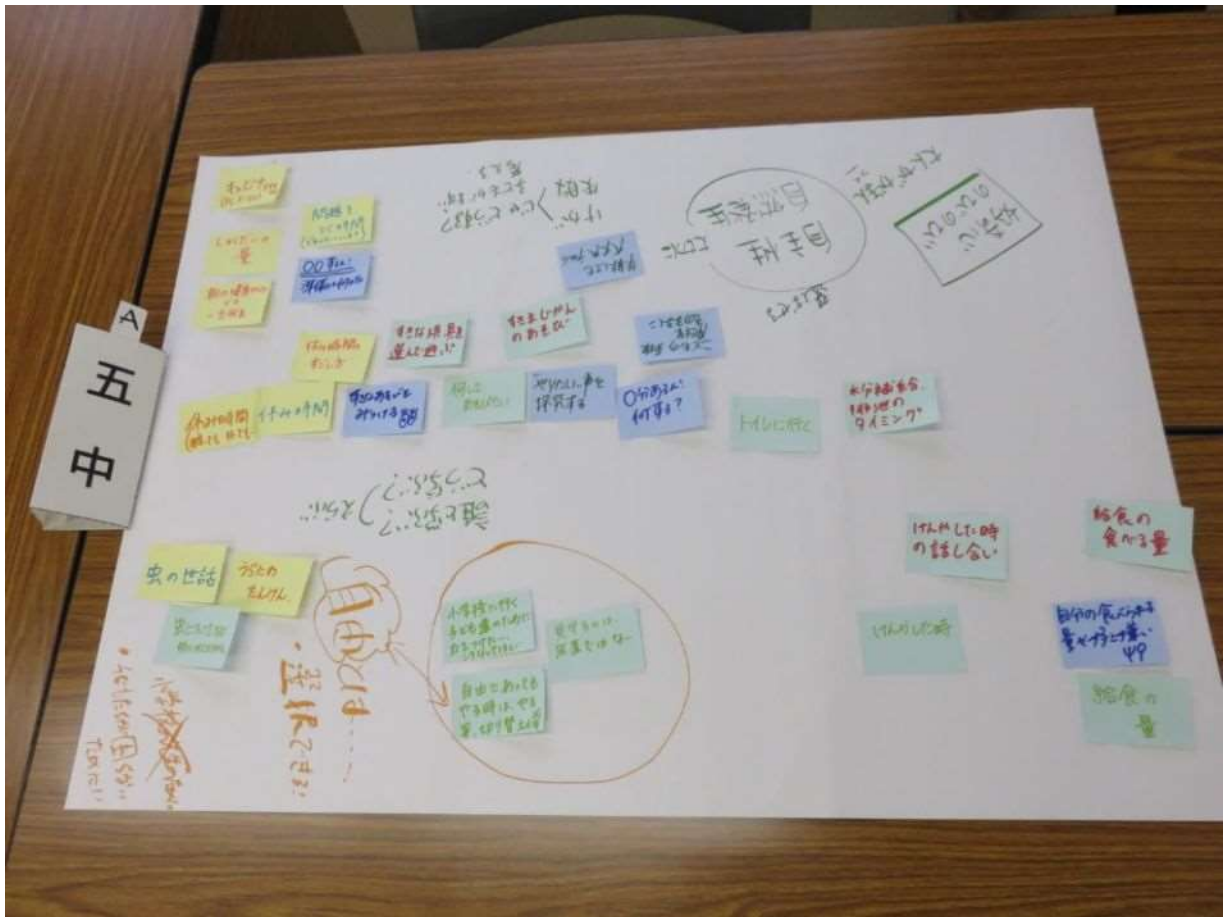
5. 教える姿勢から共に考える姿勢へ

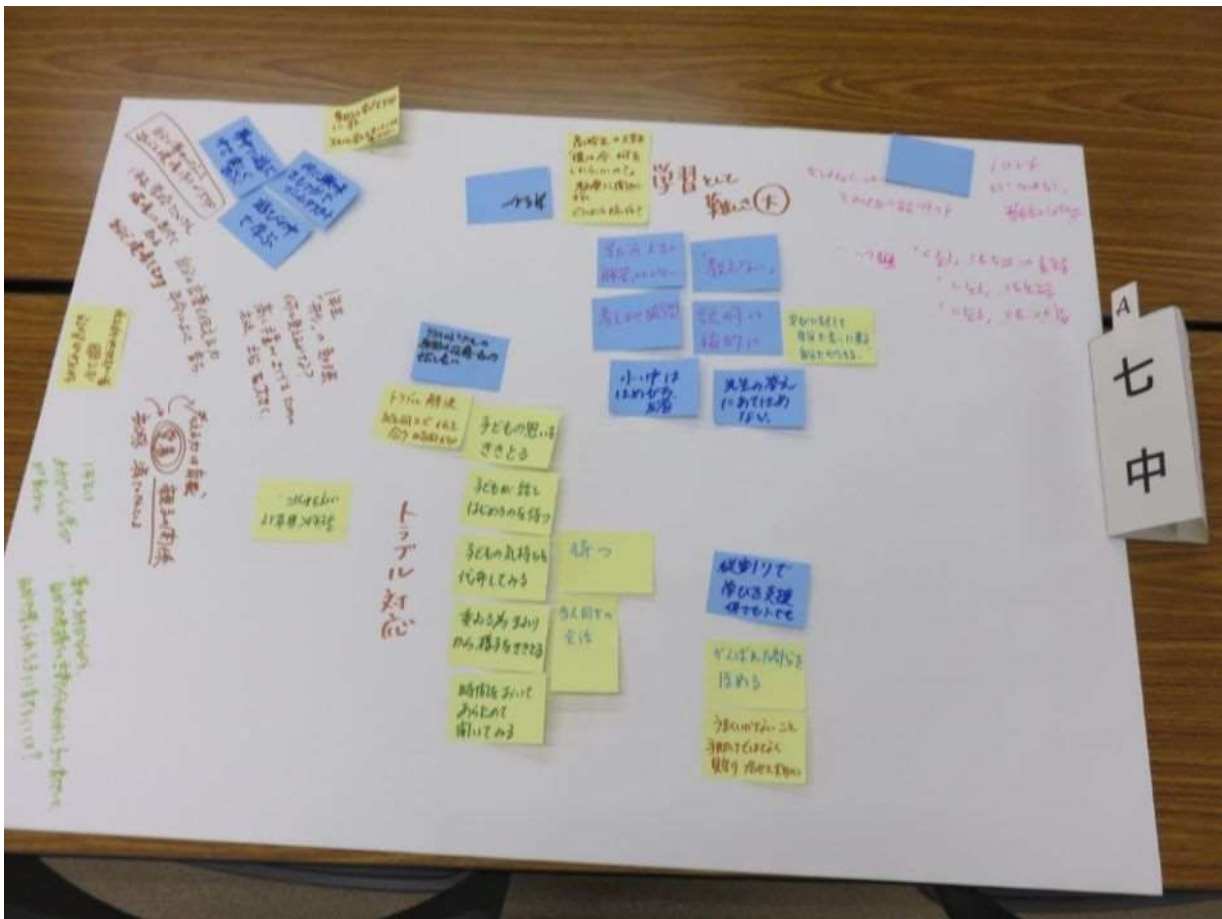
- ・大人は相談役：子どもに全権委任し、教えるのではなく共に考える（三中 B）
- ・アイデアの肯定と深掘り：間違いをすぐに正さず、自由な発想を尊重（はすはな A）
- ・ケンカの仲裁は控えめ：子ども自身で解決する場を尊重（はすはな A、五中 A）

(参考 3 : 研修写真抜粋)

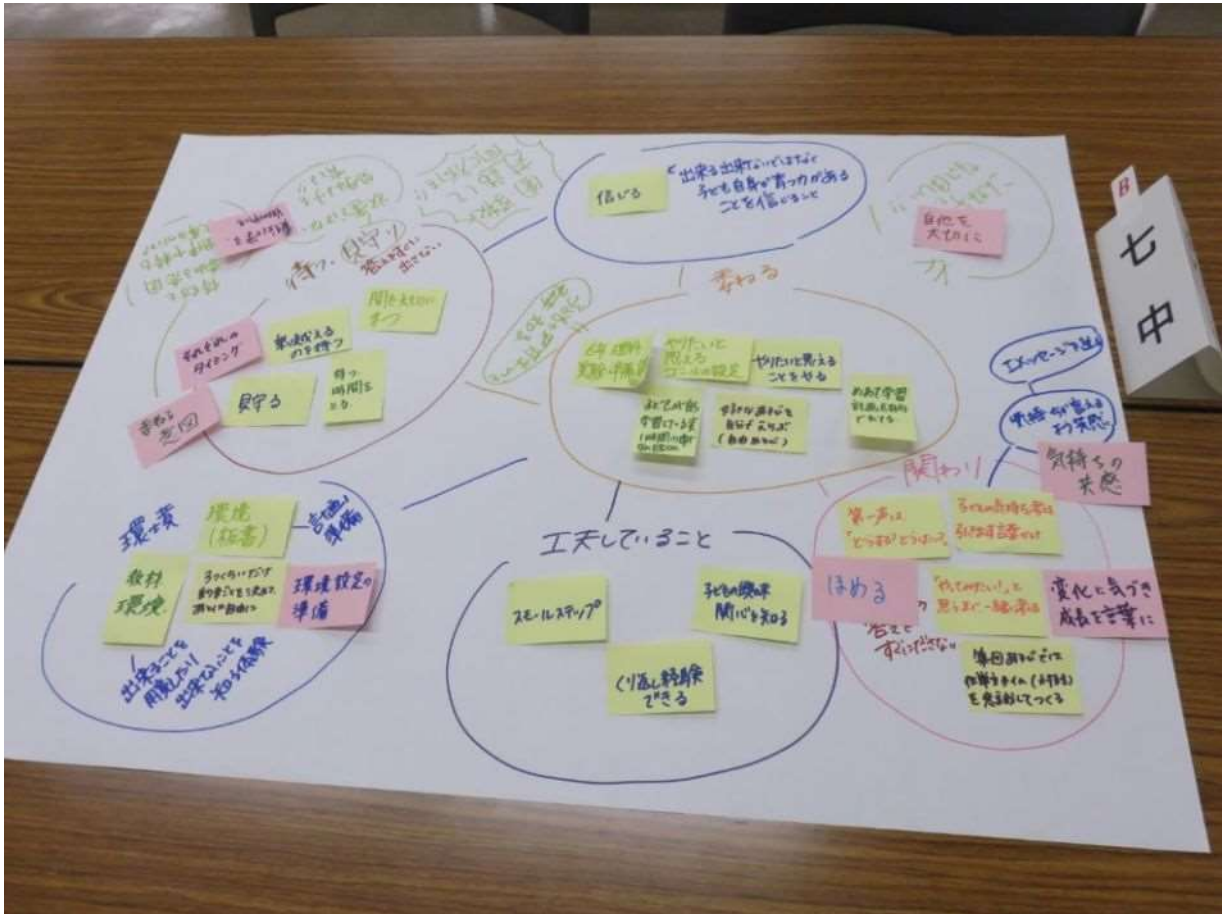








A
七
中



A
七
中

(参考4：アンケート自由記載部分抜粋)

D. 今日学んだこと、明日から（今後）取り組めることをご記入ください。

園：

- ・子供としっかりと対話をしていく。
- ・小学校に入るために何かをするのではなく、その子どものためになること、力につくことを意識して取り組んでいきたいです。それが架け橋になると思うので。
- ・小学校、中学校の先生方と対話する中で、改めて感じた就学前での土台づくりの大切さ、また、学校での取り組みの変化など、他の職員に伝え園として、できることを考えていきます。
- ・見守る、待つということは忍耐が必要だが、これからの保育、教育には大切なことなのでやっていきたい。
- ・子ども達に委ねるという事には必ずルールがあり約束もあるということ。

その中で自由に取り組み、でも取り組ませる為には、環境作り・先生たちの密な話し合いが必要である事が分かり、もっと先生達が保育について、全体で話し合いをして行かなくてはいけないと思いました。そのことをまた、小学校に届けて、そこでもしっかりと話し合いをし、連携を密にとっていきたいです。

小学校：

- ・各校や各園などの話を聞く中で、普段の授業で待つことや問いかけなどを大切にしたいと思いました。
- ・子どもたちに響く声かけが大切だと思いました。
- ・小学校や幼保、中学校の取り組みを知ることが出来ました。どちらかが求めるだけではなく、お互いの取り組みを尊重しながら連携をしていくことが必要だと感じました。
- ・小学校の入学に向けてして下さっている様々な準備を知ることができ、それを活かして今後小学校1年生への委ね方などを考えていければなと思いました。門真小は、主体を中心に個を意識されているかなと思うのですが、保幼は集団の中でというのを意識されていて、保幼での集団での形成があってこそ、個が生きてくるので、この研修はそれを共有することができて良かったです。
- ・委ねることと規律は違うようで同じことだと感じる。前の教育フォーラムでも同じように捉えました。まずは規律をしっかりさせるために取り組んでいきます。
- ・架け橋期の具体的取り組みへの校内の機運の醸成
- ・就学前教育では、遊ぶことで学んでいけるよう工夫されていることが分かりました。小学校、中学校では、学習が中心でゆとりのないカリキュラムの中、工夫して委ねる取り組みに着手されていることも分かりました。
- ・架け橋プログラムは、保幼と小をつなぐだけでなく、生まれてから大人になるまでの長い期間で子どもたちの成長や学びをどうつないでいくかを考えるために必要だと改めて思いました。子どもの自己選択を促すために、教師側が関わりや環境を整えていくことはもちろん、自己決定と責任は表裏一体だという意識を育てることも大事だと感じ

ました。カリキュラムとしてやらないといけないことはあるにしても、それを学ぶ過程をどう設定していくか、校内でも考えていきたいと思います。

・保育園、幼稚園の先生方が大切にされていることを小学校でも大切にしていきたい。小学校での取り組みを発信して小学校へのハードルを低くしていくことも大切だと感じました。

中学校：

・保育園・幼稚園・こども園における遊びの中での教育が素晴らしいと思った。教材研究や環境づくりにどれ程の時間や労力をかけていらっしゃるのかというところに想いを馳せると、中学校でももっともっと丁寧に対応していく必要があると感じた。規律の中での自己決定、そこに伴う責任、それらを行うことができる場の設定を考えていきたい。

・子どもの興味関心を尊重して、自己選択自己決定させて、見守る。そのためには準備を念入りにする。可能な限り総合ではしていますが、教科指導でも是非！

・自分の言葉で表現できるまで待つ忍耐力を持ちたいです。

E. ご感想やご意見、また、今後の研修等での希望などがあればご記入ください。

・具体的な事がもう少し多く紹介があれば、さらに良かったと思います。

・小学校、中学校の先生方ともっと話し込みたかったです。

・同じ校区でも保幼小中の先生方とそろって話すことはなかなかないので、とてもよい機会になりました。とても有意義な時間だったので、一つの中学校区でできるだけたくさんの教職員が集まって今日のような話ができればいいなと思いました。

・有意義な研修会だった。特に、保育園の先生方とは、普段、話す機会が少なく、「子どもに選択肢を与える。子ども主体の活動をめざす。」など、小中学校と同じ目標をもって、日々、子どもたちに接していることがわかった。自校においても、より一層、保幼小中を意識して、子供たちの自己実現のため、教育活動を行おうと思った

・今回のような研修をなるべく多く行い、保育内容、教育内容の中で大切にすることを、確かめ合う機会をとってほしい。

・意見交流会の対話はとても楽しくて大事。校内研修でもっと取り入れたいです。多様な視点や考え方を知ることほど学びが広がる機会は無いですね。授業でも同じことだと思いました。

・今後もこのような研修を重ねていくことが大切だと痛感しました。

・こういった交流会は大切にできるといいですね

・幼稚園や保育園の先生方のお話は新鮮で刺激を受けました。

・「子どもに委ねる」というテーマから「自由とは」、と話が変わっていったのが本質的で面白いなと思いました。

門真市幼児教育振興検討委員会委員名簿

(◎ 委員長 ○ 副委員長)

	フリガナ 氏名	所属役職名等	備考
◎	ヨシオカ マチ コ 吉岡 真知子	東大阪大学名誉教授	学識経験者
	オオニシ ヒロユキ 大西 宏幸	門真市民間保育園協議会代表 柳町園園長	関係団体を代表する者
○	ムラハシ マサヒロ 邨橋 雅広	門真市私立幼稚園協議会代表 たちばな幼稚園園長	関係団体を代表する者
	ウエハラ ヒロヒト 植原 宏仁	門真市立小中学校長会代表 門真市立門真小学校長	門真市立学校長
	テラニシ ケンジ 寺西 乾二	こども部長	本市の職員
	サイキ ユ ミコ オ木 由美子	門真市立砂子みなみこども園長	本市の職員
	オオサカ キ ヨ コ 逢坂 輝世子	門真市立上野口保育園長	本市の職員
	ミズノ チ カ コ 水野 知加子	門真市教育委員会事務局 教育部長	本市の職員

諮問書

門 真 市 保 第 7 2 8 号

令 和 7 年 8 月 4 日

門真市幼児教育振興検討委員会 委員長 様

門 真 市 教 育 委 員 会

教育長 八木下 理香



門真市幼保小の架け橋期カリキュラムについて（諮問）

門真市幼保小の架け橋期カリキュラムの策定に関し、貴委員会の意見を求めます。

答申書

答申書

令和 8 年 2 月 19 日

門真市教育委員会

教育長 八木下 理香子 様

門真市幼児教育振興検討委員会

委員長 吉岡 真知



門真市幼保小の架け橋期カリキュラムについて（答申）

令和 7 年 8 月 4 日付け門こ保第728号にて諮問されました「門真市幼保小の架け橋期カリキュラム」の策定について、当委員会を計 3 回開催し慎重に審議を重ね取りまとめた本カリキュラム案を適当と判断し、別添のとおり答申いたします。